

# の夫私工

## 子供の事態に合わせた道徳科の授業づくり

「授業におけるねらいと発問構成に焦点を当てて」

倉敷市立菅生小学校

教諭 高橋 良一



### 1 はじめに

小学校において2018年度から「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）の新学習指導要領が施行され、道徳科での主体的・対話的で深い学びが求められるようになった（文部科学省、2018）。しかし、毎時間の道徳科の学習指導を振り返ると「教師自身のねらいが不明確で、どの学年でも同じようなねらいになっていないか。」と疑問に思うようになった。実際に「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」（文部科学省、2016）では、主題やねらいの設定が不十分なまま、指導過程に過度に固執したり、「型」どおりに実践していればよいと捉えたりする

姿勢も一部には見られると指摘している。道徳科の目標に示されているように「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める」ためには、これまでの指導方法を見直し、子供が主体的に道徳科の学習に取り組むことができるように改善していく必要があると考え、子供の実態を踏まえた学習のねらいと発問構成に焦点を当てて研究を追求することとした。

### 2 授業構想シートの作成・活用

服部（2020）は、「道徳科の学習では、『おおかみの気持ち』を考

道徳科 授業構想シート			
型別「 子供の素顔」		型別「 子供の素顔」	
①	②	③	④
⑤			
⑥			
⑦			

授業構想シート

服部敬一（2020）「小学校1時間で達成できる具体的なねらいからつくる道徳の授業」明治図書出版 をもとに作成。

作成者：高橋

る人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる』のように『活動＋内容項目＋諸様相』でねらいを設定しているものが多く、あいまいである。」と指摘している。その上で、道徳科の学習のねらいがより具体化するための方法を述べている。今回は、服部の考えをもとに授業構想シートを作成した。

①子供の事態、②内容項目、③教材の特徴から学習で子供に気付かせたいこと（④具体的なねらい）を設定する。そのねらいにせまるための、発問を構成していく。（⑤

### 3 実践「名医、順庵」

主題名：広い心で

（B相互理解、寛容）

教材名：「名医、順庵」（東京書籍）

#### ①ねらいを明確にする授業構想シートの活用

第5学年及び第6学年の段階において学習指導要領解説には、「広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること」「自分と異なる意見や立場を尊重すること、違いを生かしたよいものが生まれるといったよさを知ること」「相手の過ちなどに対しても謙虚な心、広い心で受け止め、適切に対処できるようにするこ

中心発問、⑥補助発問）それに加えて、⑦板書計画の欄も設けた。これは私自身、授業を考えるとときに、ねらいや発問構成を検討する過程で板書をイメージすることが多く、授業構想シートを日々の授業計画の際に使いやすいものになりたいと思ったからである。

と。」などと書かれている。本教材は、「相手の過ちを一方的に批判するのではなく、相手の考え方や立場を理解することが大切」ということに気付くことができるという特徴から、第5学年の子供の実態を考慮し、ねらいを以下のよう設定した。

### 【本時のねらい】

「広い心」について考えることを通して、自分の中に先入観をもつのではなく、まずは相手の立場・状況を理解し、尊重して接しようとする心情を育てる。

## ②学習前

本教材を学習する前に、事前アンケートと教材を読んでおいた。45分間の授業を「考え・議論する道徳科の学習」にするためには教材の内容理解は欠かせない。そのため朝学習を活用し、内容を理解した上で本時の学習に臨んだ。

## ③授業導入場面

「広い心のもち主とは。」「せまい心のもち主とは。」のアンケート結果をテキストマイニングでま

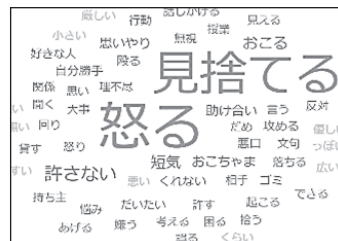
とめたものを提示し、気付いたことを意見交流した。

「せまい心だといけなう。」「広い心のもち主は許していかれる人。」という発言が出たため、

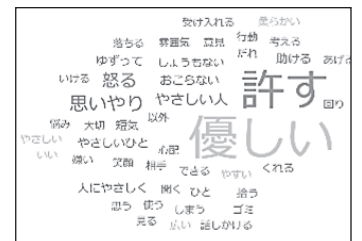
「ただ許すことが広い心につながるのかな。」と問い、道徳的価値への方向付けを行った。

## ④中心場面

中心発問では、母親の病気を治すため、高価で手の入りにくい高麗人参を盗んだ弟子を許す順庵に着目させ、「みんなだったら許すかな。」と問うた。子供は自分の考えをノートにまとめた上で、Googleのジャムボードで自分の考えに近い方を選んで意思表示した。



「せまい心」とは



「広い心」とは

そして、自分の考えとは異なる方を選んだ友達と意見交流をするように促した。子供の話す様子から、「どんな理由があっても許すのはだめだと思う。」(善悪の判断)「母親のためなら許してもいいんじゃない。」(家族愛) など様々な視点から考えることができていた。ICTを活用し、考えを視覚化したことで異なる考えをもった友達と話し合い、多面的・多角的に考えることができた。

その上で、「物を盗むことは決して許されないのに、なぜ順庵先生は許したのかな。」と問うた。師匠である順庵の姿から「相手の心や思いを考えること」「思いを受け止めること」が広い心をもつということだと気付くことができた。

## ⑤終末場面

事前アンケートから日々の生活で起きた学級でのトラブルの場面を紹介し、「こんなとき、みんなはどうするか。」と問うた。すると、「いきなり自分の言いたいことを言うのではなくて、まず

は相手の思いを聞いてから行動するとよいと思う。」「少し考えてみるのが大切。」と本時の学習で捉えた道徳的価値を生かして日々の課題を解決しようとする意見が多く出た。

## 4 おわりに

ICT活用、指導方法の多様化等と時代とともに道徳科の学習は変化していく。しかし変わらずいづれでも大切にしたいことは子供の実態を考え、学習の軸となるねらいを明確にし、さらにそこに迫るための発問を設定することだと私は考える。今後も、子供たちが思わず語り合いたくなるような道徳科の授業づくりを目指していきたい。

### 〈参考文献〉

- 文部科学省 (2018) 「小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」 廣済堂あかつき
- 文部科学省 (2016) 「特別の教科道徳」の指導方法・評価等について(報告)
- 服部敬一 (2020) 「小学校1時間で達成できる具体的なねらいからつくる道徳の授業」 明治図書出版



# の夫私工

コミュニケーションロボットを用いた、キャリア教育の充実に向けた取組

岡山県健康の森学園支援学校

教諭 山崎 好美



## 1 はじめに

本校は、岡山県北西部の山間に位置する全県学区の知的障害特別支援学校で、障害のある児童生徒の自立と社会参加を目指して、キャリア教育の視点を大切にしながら指導支援を行っている。自然豊かで広大な環境を生かした教育活動を行っている一方で、市街地からの物理的な距離や交通の不便さから、日常的な地域活動には難しさがある。

そこで、社会的・職業的自立に向けた「ワークキャリア」と、家庭や地域との繋がりや役割、余暇活動の充実など、豊かな社会生活の実現に向けた「ライフキャリア」双方の充実のために、新たにコミュニケーションロボットを活用し

た地域活動の取組を実践した。

## 2 分身ロボット

『Oriline（オリヒメ）』（以下オリヒメ）とは

カメラやマイクなどが搭載され、インターネットを通して操作できる人型分身ロボットである。自分の声や、遠隔操作する顔や手の動きが直接相手に届き、リアルタイムでやり取りができるため、臨場感あふれる感覚を双方向で共有することができる人型ロボットである。

## 3 ワークキャリアの視点から

新見市内にある本学園のアンテナ

ナシヨップや、高梁市内で実施される「はたらくマーケット」に参加し、遠隔での地域交流活動を行った。児童生徒が教室から参加し、商品の紹介や日常会話を楽しむな



はたらくマーケットクビローボット



アンテナショップ地域交流

ど、会場に訪れる地域の様々な年代の方と交流した。

また、岡山駅前広場で開催された「キャリア教育フェア」では、生徒会役員がオリヒメを持って会場参加し、他の生徒は学校から遠隔参加した。人型ロボットのもつ親近感に魅了され、自然と人が集まって会話が生まれ、会場の生徒も教室から参加する生徒も、訪れた地域の方や他の支援学校の生徒と多くの交流ができた。会場参加の生徒の中には、初対面の方や人が集まる場所が苦手な生徒がいたが、学校に残る友達に会場の様子を見せたいという思いやりの気持



キャリア教育フェア

ちと、初対面の方とのやり取りはオリヒメを操作する友達が担ってくれるという安心感から、積極的に会場内を回ることができ、大きな学習成果に繋がった。

#### 4 ライフキャリア充実の視点からの取組

コロナ禍に伴い、重症化リスクの高い生徒Aが、校外学習を欠席せざるを得ない状況となったことから、校外で学ぶ機会をできるだけ本来に近い形で遂行できるように検討し、オリヒメを活用した。生徒Aは学校に登校し、友達がオリヒメと一緒に行く形で校外学習に参加することができた。蒜山方面での活動では、遠隔操作で現地の



冷泉体験

また修学旅行では、訪問教育生Bが同級生にオリヒメを託すことで、初めて同級生と一緒に修学旅行へ参加し、自宅から修学旅行先の同級生と一緒にミカン狩りを体験することができた。オリヒメを遠隔操作し、自分で収穫したミカンを友達が持ち帰ってくれたり、一緒に買い物学習に参加したりするなど、双方にとつ



修学旅行ミカン狩り

ての一体感が感じられ、仲間意識が生まれる学習活動となった。どちらの実践においても、オリヒメと同行する友達からダイレクトに現地の様子が届き、それを受けながら教室や自宅で体験活動を行うことで、充実した活動となった。

#### 5 成果

オリヒメを活用することで、操作する生徒は見たい方向ややりたい動作を自分で考えて表出することができた。また、託された生徒には「自分達が一緒に連れていく」という責任感や役割意識が生まれ、さらに、友達に現地の様子を分かりやすく伝え、一緒に活動するために、見え方を想像して映すことや、言葉や感情表現を交えた伝え方を工夫することができた。双方がより主体的に活動することができ、ツールとして有効であると感じた。

また、人型ロボットの特徵から、周囲は直接人と接するときと同じように働き掛けるため、やり取り

に自然と温かみが増し、臨場感のある活動に繋がり、コミュニケーションの学習としても有効なものとなった。

#### 6 おわりに

キャリア発達支援において、人とのやり取りは大変重要であると考え、オリヒメの活用は、他者を意識したコミュニケーションの学習に効果的なツールであると考えられ、人型ロボットの良さを生かしたコミュニケーション学習の一つとして実践を紹介した。この他にも、お互いの顔を見ながらやり取りができる遠隔コミュニケーションの良さを生かして、タブレット端末を使ったZoomやクビートロボットでの活動も取り入れている。

今後も、場面や目的、実態に応じて、どのツールを選ぶのがより最適であるかを考え、学びを深めていくことができるように実践を重ねていきたい。